思文閣出版
2,052円（税込）

自己発見のピルグリム

新島襄を語る・別巻（五）

本井康博（元大学神学部教授）著

「新島襄を語る」シリーズの十五冊目。各地で行なった最近の講演を十四編、収録しました。二〇〇四年のシリーズ発刊以来、一昨年に十四冊目を出したところで、「打ち止め」としました。

しかし、その後も伝えたい情報や想いが次々と出現してくるうえに、肩の力を抜き、くだけた話し言葉で「語る」魅力が忘れられず、今回、シリーズを再開しました。先行き不透明ですが、これまで通り自費出版で続行してみます。

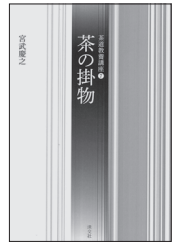
新発足の本書にも、シリーズ全体の通奏低音、すなわち新島襄の「志」の究明が、一貫しています。ほかにも、大河ドラマ「八重の桜」効果で会津若松城に建てられた山本（新島）八重像や、東京神田に新設された「錦三・七五三太公園」、さらには新島の肖像画を飾るジョンソン・チャペル（アーモスト大学）正面の「異変」など、最新情報やトピックスを画像で紹介することにも努めました。

さらに、朝の連ドラ「あさが来た」がらみで、同志社（新島襄）と奈良（新島公義、成瀬仁蔵、大和郡山、川上村）との密な関連や、新潟、滋賀（近江八幡）にまつわる話題も取り上げました。

「新島旧邸」の紹介ビデオ（現在、新島会館別館で公開中）のナレーション台本も収録しました。普段は立ち入れない屋内見学をバーチャル・ツアで楽しんでいただけます。

本書を通して「自己発見」（自分探し）の一歩一歩が「ピルグリム」（巡礼）であることに共鳴していただければ、幸いです。

著者より



淡交社
1,296円（税込）

茶の掛物

宮武慶之（元大学研究開発推進機構特別任用助手）著

本書では茶の湯にはなぜ掛物が必要なのか？という素朴な疑問を出発点として、古来の著名な作品から近代の作品や芸術家の作品も含め、実際の茶会での使用と合わせて構成した。また、調査の過程で新発見となる作品もいくつ発見できた。

四季折々、床の間は移設を表する場所でもあった。そこで過去の生活習慣と掛物、床の間とも関係や、作品の形態による名称の種類、などについても紹介した。

特に第6章「茶人と掛物をめぐる物語」では掛物が茶会で、どのような意図で使用されたのかを知るため、過去の茶会記から、桃山時代の堺の商人で『山上宗二記』の筆者である山上宗二、伏見奉行をつとめ京都ともゆかりの深い小堀遠州、表千家七代目である千宗左如心斎、石州流の茶の湯を嗜んだ新発田藩十代藩主溝口直諒、江戸の町人数寄者でこれまで謎の茶人であった吉村観阿、近代三井家の大番頭で茶人であった益田鈍翁、裏千家十五代家元である千玄室氏、以上の七人の人物と関係の深い掛物を取り上げた。これらから茶の湯における掛物と使用された背景をみていきたい。

また第8章「掛物にみる茶の心」では茶の湯はなぜ掛物を必要するのか、つまり掛物のどのあたりに〝茶の心〟があるのかいう点を問う内容とした。

著者より

集英社
1,404円（税込）

浜矩子の歴史に学ぶ経済集中講義

浜矩子（大学ビジネス研究科教授）著

昔を通じて今をみる。これが本書の基本視点だ。今のことは、今ばかりみていたのでは、決して解らない。昔とどこがどう違っているのか。なぜ、違っているのか。何が変わったから違いが発生しているのか。これらのことを把握することなくして、今、何がどうなっているのかを解明することは出来ない。

本書を構想するに当たって、以上の構えから姿勢がずれないことを心掛けた。通貨・通商・財政・金融。これら経済の4本柱というべきテーマについて、昔を踏まえて今をみることを試みた。

本書のもう一つの視点が「謎解き」である。経済活動は人間ドラマだ。人間しか携わらない。それが経済活動だ。だから、そこにはおのずと人間たちが紡ぎ出すドラマがある。そして、このドラマは常にミステリーに満ちている。推理小説仕立てだ。経済的風景画は、だまし絵だったり、判じ物だったりする。そこに秘められている謎を抽出して解明する。それが経済分析というものだ。人間ドラマの謎解きである。

読者の皆さんとともに経済名探偵になって行く。いつも、このことを願っている。名探偵となるための勘所は何か。それは質問を発することである。謎解きの急所めがけて的確な質問を放つ。これが出来るか否かで、探偵さんの腕前が決まる。名探偵は、偽りの手掛かりに決して惑わされない。名探偵は、一般通念に決して丸め込まれない。自分の疑念が晴れるまで、あくまでも追求の手を緩めない。質問を投げかけることを止めることがない。この心意気も又、本書を通じて皆さんと共有したいと考えた。

著者より

木鐸社
2,700円（税込）

有権者のリスク態度と投票行動

飯田健（大学法学部准教授）著

2012年12月26日に発足した安倍政権は、経済政策、安全保障政策の面で大きな現状変更を掲げる政権である。経済面では、前例の無い規模での金融緩和をはじめとするいわゆるアベノミクスと呼ばれる一連の経済政策。そして安全保障面では、自衛隊の役割の拡大による日米同盟の強化。こうした安倍政権による大胆な現状変更を可能にしているのは、積極的であれ消極的であれ、結局のところ安倍政権に対する有権者の支持である。

本書は、このような有権者の支持について、大きな現状変更を掲げる政治に対するリスク受容的な有権者の支持という新たな理論的観点から理解を試みるものである。安倍政権の政策は大きな現状変更をもたらす分、不確実性が高い。良い結果をもたらす可能性がある一方、悪い結果をもたらす可能性も高い。現状が維持されることよりも、こうしたリスクの高い選択肢を受け入れることを好む有権者、すなわちリスク受容的な有権者こそが安倍政権支持の中心である。

以上のような主張を展開するため、本書では時系列に沿って、2012年12月の衆院選での自民党の圧勝、2013年7月の参院選での「ねじれ」解消、2014年7月の集団的自衛権行使容認の閣議決定に対する世論の容認、2014年12月の衆院選での共産党の躍進、2015年秋の安保法制での抗議活動の要因について、有権者調査データの計量分析を通じて検討している。現在進行中の日本の選挙政治への一貫した理解を得るための一助となれば幸いである。

著者より

陶芸考

清水穣（大学グローバル地域文化学部教授）著

現代思潮新社
2,376円（税込）

陶芸作家が、現代美術的なオブジェを作ることは昔からあって、なぜかそういうオブジェは現代美術の立体造形と同列ではなく、「現代陶芸」という限定された保護区の中で評価され流通してきた。が、ここ十数年来、内外を問わず、現代美術作家の中から陶芸を表現手段とする者が現れるとともに、陶芸作家の中からも、現代美術のギャラリーと契約して陶芸界と美術界を横断して活躍する者が現れ、そのギャラリーが、ごく普通の（つまり器を焼いている）陶芸作家を取り扱い作家に加えるといった現象が目立ってきた。

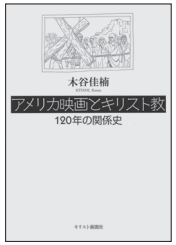
当然のように保護区は消え、現代の陶芸は、現代美術と同じ批評の俎上に載ることとなった。すなわち陶芸とは、画家が絵の具を、彫刻家が石や木を用いるように、そこに具象もあれば抽象もあるように、器とオブジェとを問わず、メディウムスペシフィックな、つまり特定のメディウム（例えば粘土）と強く結びついた芸術の一つとして、現代美術に参与することとなったのである。

本書はそういう現状に応える陶芸作家論である。美術や写真の批評を書いてきた私が、縁あって陶芸批評に手を染めるようになって意外だったことは、そこに批評と呼べるものが少ないことであった。歴史研究、技法説明、陶芸家の伝記、印象論を除いてしまうと、作品自体を論じた部分は、水簸後の粘土のように、僅かなのであった。その意味で、本書は現代陶芸界のニッチを埋める本でもある。

著者より

アメリカ映画とキリスト教——120年の関係史

木谷佳楠（大学神学部助教）著



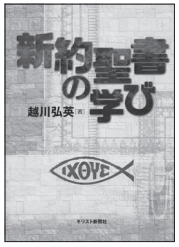
三省堂
3,456円（税込）

私は2003年に「ピカピカの1年生」として同志社大学の神学部に入学しました。当時の学部長は森孝一先生（現神戸女学院長）でした。森先生には、先生が2010年に神戸女学院の院長・理事長に就任されるまで大変お世話になりました。本書『アメリカ映画とキリスト教——120年の関係史』も、森先生の研究分野であるアメリカの政治や社会を宗教的観点から読み解く、という方法論を応用したものです。アメリカ映画という娯楽文化の領域に、宗教が影響を及ぼした顕著な例は1930～1960年代まで続いた検閲です。これは映画産業が自主検閲という形で始めたものですが、検閲のルールを定めたのはカトリック教会の司祭や熱心な信徒です。キリスト教的倫理観に沿って規定されたルールなので、スクリーンから暴力的な描写や性的な描写は排除され、衣装も露出の少ないものに改められました。また、検閲以外でのキリスト教の影響は、アメリカン・ヒーローにも見ることができます。アメリカン・ヒーローのモデルはイエス・キリストです。ヒーローは人々を救うために自らを犠牲にして悪と闘い、敵にひどく痛めつけられますが、必ず最後には復活します。イエス・キリストに人性と神性があるように、ヒーローも人としての弱さと、人の力を超える強さの両方を持ち合わせているのです。このように、本書は宗教を軸にしてアメリカ映画を読み解いています。アメリカ映画が好きな方に読んでいただけると幸いです。

著者より

新約聖書の学び

越川弘英（大学キリスト教文化センター教授）著



キリスト新聞社
2,160円（税込）

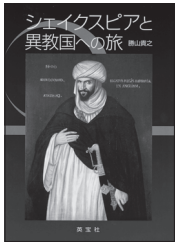
本書は私が学内で担当している『新約聖書とキリスト教』のテキストとして書き下ろしたものである。すでに出版している『旧約聖書の学び』（キリスト新聞社）と同様、同志社大学に入学して初めてキリスト教や聖書に触れる学生を想定したもので、聖書の概要を学ぶとともに、そこに含まれる思想やメッセージが現代世界に生きる私たちとどのような関わりを持つかを示唆することに配慮してまとめている。私自身は聖書学の専門家ではないが、十数年にわたって講義してきた内容をあらためてまとめなおし、できるかぎり最新の学説やテーマにも目を配りながら執筆したつもりである。

「序」と「むすび」を除いて、本文は3部・12章から成り、第1部は「新約聖書の背景」と題して、キリスト教が誕生する舞台となったユダヤ人とユダヤ教の歴史的社会的背景を概説している。第2部は本書の中心となる部分で、キリスト教の開祖である「イエスの生涯とメッセージ」を扱う。そして第3部で「初期キリスト教と新約聖書」と題して、イエスの弟子たちの活動を述べ、その後、1世紀後半から2世紀にかけて記され、後に「新約聖書」にまとめられていった27の諸文書のそれぞれを概説した。さらに私自身の特別な関心のあることがらについては、「コラム」として55項目にわたって記している。聖書について入門的な知識を学びたい方は是非ご一読いただければと思う。

著者より

シェイクスピアと異教国への旅

勝山貴之（大学文学部教授）著



英宝社
4,536円（税込）

一五七〇年、ローマ教皇に破門を言い渡されたエリザベス一世は、カトリック勢力により地中海交易から閉め出されることとなった。エリザベスに唯一残された道は、イスラム圏、すなわち異教国との交易であった。エリザベスは、北アフリカのバーバリー地方、更に東地中海を支配するオスマン帝国との交易を模索し始める。人々は異教の国々に関心を寄せるようになり、異教国へと旅した者たちが書き記した旅行記が、人気を博すようになった。

庶民に人気のあった演劇は、旅行記に綴られた様々な事柄を、具体的に示す絶好の場に他ならない。人々は旅行記の中に展開されるエピソードが眼前に繰り広げられる様に心踊らされ、劇世界に引き込まれた。舞台は、異国の風俗習慣を時に誇張し、また時には歪曲することによって、しばしば英国人の優越感を満足させたのだった。

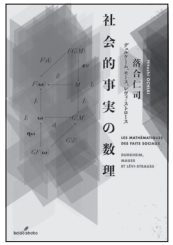
しかし、そこに描かれた異教徒たちの存在は、英国人の内面に変化をもたらせたこともまた事実である。遥か彼方に暮らす異邦人である彼らと邂逅し、キリスト教世界とは決して相容れることのない異教文化との接触を通して、英国人は反発と妥協という複雑な心理的葛藤を経験したはずである。演劇は、まさに観客たちに他者との遭遇の場を提供し、英国人の世界観とアイデンティティを問いかける大きな役割を果たしたにちがいない。

本書は、シェイクスピア演劇と旅行記の邂逅をとおして、英国人の自己成型の軌跡を辿ろうとしたものである。

著者より

社会的事実の数理
―デュルケーム、モース、レヴィ＝ストロース

落合仁司（大学経済学部教授）著



勁草書房
2,376円（税込）

自然科学とは違って、社会科学は一つでない。アメリカの個人の心理から出発する社会科学に対して、フランスの社会の構造から出発する社会科学がある。今日わが国においてもアメリカ流の心理主義社会科学が流行しているが、その一因にアメリカ流が数理モデルを多用していることもあるに違いない。蓋し数理モデルは現代学問が科学であることの身分証明であるかのようだからである。

本書は、フランス流の構造主義社会科学に、アメリカ流を凌駕する水準の、数理モデルを与える試みである。フランス流の社会科学は「個人に外在し個人を拘束する行動、思考、感情の様式」である社会的事実（デュルケーム）から出発する。さらにアメリカ流の社会科学が唯一の実在と考える個人の行為を「社会的事実を反復し持続させる慣行的実践、慣例的使用」である出来事（ブローデル）と捉える。

この社会的事実と出来事の関係、構造と行為の関係を、多様体とその上のベクトル束（の切断）によって数理モデル化するところが本書の白眉である。アメリカ流の個人の心理から社会の構造を説明しようとする社会科学とは全く違った、社会の構造と個人の行為が随伴する、すなわち相互に決定し合う実相が明らかになる社会科学を、読者は目の当たりにすることになる。

著者より

あなたのキャリアのつくり方
―NPOを手がかりに―

浦坂純子（大学社会学部教授）著

ちくまプリマー新書
886円（税込）

筆者にとっては、2009年1月に出版した『なぜ「大学は出ておきなさい」と言われるのか―キャリアにつながる学び方―』以来の2冊目の単著である。同じちくまプリマー新書からの続刊ということで、勝手知ったる部分はありながらも、タイトルを含めて怖いもの知らずだった前書をどこかで意識しながらの執筆は、妙なプレッシャーのかかる作業であった。

前書からの8年間で、筆者の問題意識がどのように変化したのか、その辺りの経緯は「おわりに」をお読みいただきたい。〝「普通に働く」からあぶれたら終わり、という見方に対して、「そうではない」と言える何かを示したいと思って本書を書いてきました。（中略）「普通に働く」に代わるキャリアの選択肢として、私にはずっと追い続けてきたNPOの世界が輝きを深めてきたように感じました〟と書いている。

様々な状況が現在進行形で変化し続けている中で、強く明快なメッセージを打ち出すのには一抹の戸惑いがあった。視界不良な時代に生きる自分の行く末を模索することが、不安や迷いと背中合わせなのは、ごく自然なことである。NPOで働いてみよう！なんてとても言えない。若者にあれこれ指南するどころか、中高年になったところでキャリアは常に暗中模索である。

それでもなお、自分の「チカラ」を社会に活かし、貢献する新たな「カタチ」に気付かせてくれる場を、これからも研究、教育を通じて追い求めていきたい。その筆者自身の決意の書でもある。

著者より

説話の中の僧たち

廣田収（大学文学部教授）他著

新典社
2,592円（税込）

私たちが雑談をするとき、その内容は、酔っぱらっていようがいまいが、日ごろの積り積もった愚痴であったり、他人の悪口や誹謗中傷であったり、結局自分の自慢話だったりすることが多い。残念ながら、あまり人のことを褒め讃えたり、敬服の念を披露することなどは少ない。

これと同様に、日本の古典文芸の中には、僧侶の言動についてあれこれと批評した物語が数多くみられる。そこには、およそ二つの傾向がある。ひとつは、高徳の僧の生き方が語られるもので、欲望にまみれた凡愚の私たちからすると、思わず襟を正さずにはおられないような厳粛な物語がある。もうひとつは、規範たるべき僧が、世俗の私たちからしても、とんでもなく嘲笑の対象となるような、「遺憾」の意を表明したくなる物語がある。ただそれらは、いずれにしても僧の言動を引き合いに出すことによって、編者は自己の主張を言挙げする、という仕掛けをもつ物語なのである。

本書は、古代から中世を中心として、日本霊異記、今昔物語集、宇治拾遺物語、古事談、沙石集、真言伝、扶桑略記、平家物語、曼荼羅などを専門とする研究者が、それぞれのテキストを代表する僧たちを面白く紹介し、研究の最前線に立った斬新な分析を加えるものである。仏教文学の入門書というよりも、古典文芸の読み方を示す入門書として御覧いただければ幸いである。

著者より

フィリピンを知るための64章

木場紗綾（大学政策学部助教）他著

明石書店
2,160円（税込）

ドゥテルテ大統領の就任や急速な経済成長、英語留学、南シナ海問題などで近年、日本でも注目が集まっているフィリピンについて純粋な好奇心をもつ読者がどこからでも読みはじめることのできる入門書である。2001年に出版された『現代フィリピンを知るための61章』の内容を全面リニューアルした。21世紀に入り、フィリピンは経済的にも政治的にも、そして社会的にも大きな変貌を遂げている。そんなフィリピンの「いま」を説明するために、フィリピンと深く関わってきた若手・中堅の研究者、ジャーナリスト、実務家たちが中心になって執筆した。文化、歴史、政治、経済、日比関係などの基本的なテーマを網羅しているが、単に現状や制度の概説にとどまらず、たとえば「アウトローの世界―曖昧な法の境界に生きる」、「日比二世10万人時代―二つのルールを生かす」、「英語留学―親密なマンツーマン教育」など、フィリピン事情の最前線を捉えることを目的に、この国の魅力を広く・深く伝える本になっていると自負している。各章の末尾にはより深く学びたい人への参考文献も充実させた。さらには「64章」とは別に、「富裕層の子たちの葛藤」、「現地従業員の労務管理はなぜ難しい？」、「スタディツアー―多様な価値観との遭遇」、など、フィリピンで生活した経験をもつ著者たちが独自の視点で切り取った現地の最新情報も、10の「コラム」という形で収録している。

旧版を持っている方も、ぜひお買い求めいただきたい。新旧の違いからも、この15年間のフィリピンの変化と現在の躍動感を感じていただけると思う。

著者より

宗教と対話
―多文化共生社会の中で

小原克博（大学神学部教授）
勝又悦子（大学神学部准教授）共編著

教文館
3,240円（税込）

ＩＳ、パレスティナ問題、移民排斥…メディアを騒がせる世界情勢の陰には宗教が絡んでいる。本学の教員が多数寄稿した本書は、価値や文化が多元化した現代において、宗教、宗教学の役割を多面的に探った野心的な書である（以下、本学教員は【】で所属を示す）。

第一部では、「国際政治から見た宗教研究への期待」（村田晃嗣【法】）、「社会福祉におけるスピリチュアリティ―宗教と社会福祉の対話」（木原活信【社会】）、「宗教と対話―多文化共生社会の可能性と宗教間教育の意義」（小原克博【神】）を通して、国際政治、社会福祉、教育と宗教との協同が探られている。第二部では、「宗教間対話運動と日本のイスラーム理解」（塩尻和子）、「エジプトにみる聖家族逃避行伝承をめぐる宗教共存―ムスリムとコプト正教徒の関係」（岩崎真紀）、「イスラームの平和―慈悲と慈愛を通して」（四戸潤弥【神】）が、イスラームの理解と対話を図る。第三部では、「ユダヤ教文献にみる『自由』と『支配者』像―多文化共生への他者理解に向けて」（勝又悦子【神】）、「中世ユダヤ思想における『民主主義』理解―アバルヴァネルを中心に」（平岡光太郎【研究開発推進機構および神】）、「イスラームと奴隷」（森山央朗【神】）が、ユダヤ教、イスラームを通して「民主主義」を再検討する。

論考は多岐にわたり、主張は必ずしも一致しないが、それはとりもなおさず、現在、宗教が直面している問題の複雑さを伝えるものだ。

勝又悦子より

戦後日本の開発と民主主義　地域にみる相剋

庄司俊作（大学人文化学研究所教授）編著

昭和堂
6,912円（税込）

本書は、同志社大学人文科学研究所部門研究「高度経済成長と戦後日本の社会史」、「戦後日本の開発と民主主義の社会史」の４年間に及ぶ研究成果を取りまとめたものである。研究会のメンバー12名が執筆する。

本書では「開発と民主主義」の視点で、地域から見た戦後日本社会の姿を歴史的に検証している。本書は地域の史資料や現地調査にもとづく、地域に見る開発と民主主義の相克の戦後史である。ここでいう「民主主義」は政治的意味とともに、「人民が自由と平等を保証する行き方」という社会経済的意味を重視している。地域の戦後史は多様な視角がありうるが、ひとまず①開発・都市計画と消費②社会運動③教育④労働・農業⑤沖縄の５分野の研究成果を提示した。

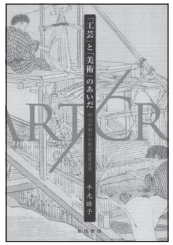
歴史の変化には歴史の断層の可視的変化とともに、社会構造の（不可視の）変化がある。高度成長期に関していうと、工業や商業が急激に発展しＧＤＰが大幅に上昇した、給料が上がり国民の生活は物質的に豊かになった、テレビが普及し新幹線ができ道路がよくなって生活が便利になったなどは歴史の断層の変化である。一方、高度成長期は大きな社会変動の時期であり、農村から都市への人口大移動を考えただけでも、人々が生きる地域社会を根底から変えてしまうような構造的な不可視的変化が多極的にあったことが見通される。

このような戦後日本社会の変化を主として国と自治体のありよう、それに規定された人々の経済社会や政治との関わりから総体的に歴史化することを試みたものである。

著者より

「工芸」と「美術」の間
明治中期の京都の産業美術

平光睦子（女子大生活科学部准教授）著



晃洋書房
3,564円（税込）

京都は、日本有数の「美術工芸」の地であることには疑う余地はないでしょう。その長い歴史のなかでも明治という時代は、「美術工芸」の地、京都の存亡をかけた激動の時代であると同時に、「美術工芸」という分野が成立した時代でもありました。本書の目的は、この「美術工芸」とは何かを問い直すことにあります。「美術」は明治期に西欧からもたらされた概念であり、「工芸」もまた明治期になって用いられるようになった言葉です。もちろん、その「工芸」の実態はそれ以前から続く日本在来の技芸であり、長い伝統をもつものも少なくありません。このように捉えると、「美術工芸」は西欧の価値基準で日本の技芸をはかる、ある種の不整合や矛盾を抱えた分野として誕生したことがわかります。そしてそこには、継承と革新の間で揺れる明治期の日本が凝縮されていたように思われます。

京都の明治期は、戦後の荒廃と奠都の憔悴からスタートします。そのなかで美術工芸に携わる人々が難局に果敢に挑み続ける逞しい姿には、ものづくりの地の底力を感じずにはいられません。この課題にとりくみはじめた頃には想像すらしていませんでしたが、今、本書の舞台である京都で暮らしはじめると、ものづくりにかける人々の確固たる意志をいよいよ生々しく感じることがたびたびあります。明治の匠たちの技と精神性は、今も、脈々と受け継がれているのです。本書をつうじて、その一端をお伝えできれば幸いです。

著者より

百人一首の正体

吉海直人（女子大学表象文化学部教授）著

KADOKAWA
778円（税込）

百人一首に関する本は山ほど出版されています。ですが、その大半は単なる百人一首の和歌の解説書に過ぎません。それ以上深く分け入った本となると、ほとんど見当たりません。そこでみなさんに百人一首のことをもっと深く、そしてもっと広範に知っていただくために、本書をまとめてみました。ですから本書は、入門編に続く二冊目の本（上級者向けテキスト）ということになります。「百人一首の正体」という書名は、「百人一首への招待」をより先鋭化したものです。さっそく内容を紹介しましょう。本書は、全体が六章仕立てになっています。最初の序章では読者の常識に疑問を投げかけつつ、百人一首に広い世界があることを紹介しています。その上で第一章では、百人一首の成立にまつわる多くの情報を提供しつつ、わかりやすく解説しています。第二章では、成立から現在に至る百人一首の享受史をたどっています。第三章では、百人一首のパロディとして異種百人一首、愛国百人一首、もじり百人一首、そして英訳百人一首などを紹介しています。第四章では、百人一首の撰歌意識を探るために、秀歌撰との違いについてさまざまに論じています。第五章では百人一首の現代語訳だけでなく、各歌の鑑賞の見どころも紹介しています。本書には、みなさんの知らない百人一首の世界があります。本書を読んで、「百人一首の正体」を見定めてください。きっと百人一首のことがもっと好きになるはずです。

著者より